

画像資料に見る魏晋時代の武器—河西地域を中心として—

内 田 宏 美

はじめに

東アジアにおける武器の発達、中国を起点に展開されてきた。秦漢時代に鉄製の武器が登場しこれが普及することにより、中国の武器は新たな画期を迎える [宇野2002]。武器に関しては、これまで様々な角度から研究がなされてきたが、魏晋時代の武器については遺跡から出土する資料が少なく、明らかになっていないことが多い。

限られた資料のなかで魏晋時代の武器を復原する際、重要な手がかりとなるのが、磚室墓に描かれた「画像磚」や「壁画」¹⁾といった画像資料である。本研究は、近年調査事例が増加している甘肅省河西地域で出土した画像資料を集成、分析し、魏晋時代の武器の実態やその特徴について考察しようとするものである。当該期の武器の様相をより明確にするため、河西地域の磚室墓や土洞墓に副葬された武器、漢代の画像資料についても取り上げ、比較検討を試みる。

1. 河西地域の画像磚墓・壁画墓に描かれた武器

武器が描かれた画像磚・壁画は、甘肅省嘉峪関市・酒泉市・高台県の魏晋墓で出土している。以下に、遺跡の概要と武器を描写した画像磚・壁画の内容を記す。各遺跡の位置については図1を、武器の名称や特徴については、文末の[参考資料1、2]を参照されたい。なお、遺跡の名称や年代、画像磚・壁画の画題については、報告書や概報の記述に従っている。

①嘉峪関市新城古墓群

遺跡は嘉峪関市新城郷に位置する。嘉峪関市・酒泉市周辺に広がるゴビ灘に分布する古墓群の1つで、これまでに1000基以上の墓が確認されている。1972～1979年に13基の墓の調査が行われた。築造年代は魏～西晋時代とされる。画像磚墓は1、3～7、12、13号墓で、武器の描かれた画像磚は3、5～7号墓で出土している [甘肅省文物隊ほか1985、張2001]。

3号墓前室北壁—東壁「出行図」(M3:01,02,04,06)²⁾：画像磚に50名余りの騎兵が描かれ、兵士の多くが稍を手に行っている(図2)。

3号墓前室南壁「營壘図」(M3:08)：画面中央に描かれた将軍(墓主)の大帳を、小帳が三重に取り囲んでいる。小帳の外には盾と戟が立て掛けられている(図3)。

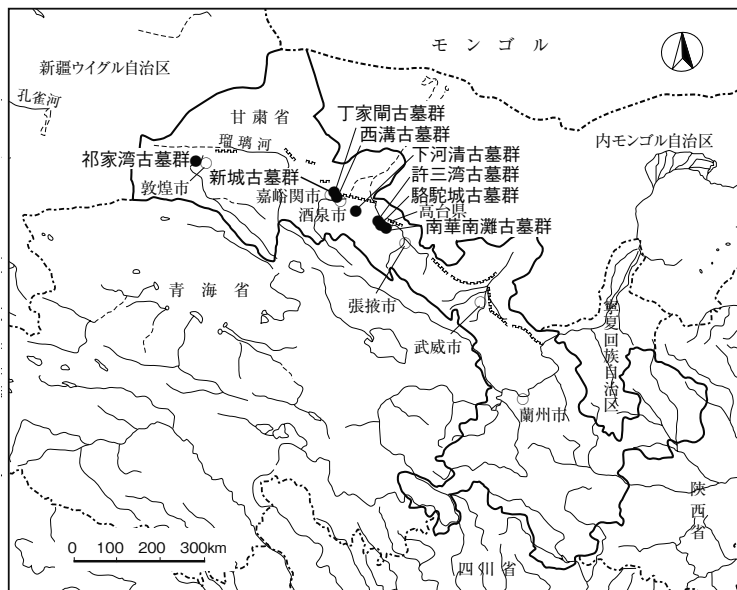


图1 甘肃河西地域魏晋墓の分布



图2 嘉峪关市新城3号墓「出行图」



图3 嘉峪关市新城3号墓「营壘图」



图4 嘉峪关市新城3号墓「兵屯图」

3号墓前室西壁「兵屯図」(M3:036)：軍事訓練の様子が描かれている。二列に並んだ歩兵は盾と戟を手にしている(図4)。

5号墓前室東壁「出行図」(M5:026)：馬に乗った墓主の前後に騎兵が描かれている。騎兵は3号墓の出行図と同様、稍を手にしている。

5号墓後室南壁「刀鞘図」(M5:068)：後室奥壁に描かれた9枚の画像磚のうちの1枚で、鞘に収められた環頭の刀(環首刀)が単独で描かれている(図5)。

6号墓中室西壁「出行図」(M6:097)：連続して描かれた6枚の出行図のうちの1枚で、3人のうち中央の1人が環首刀を手にしている(図6)。

7号墓前室北壁「出行図」(M7:035)：連続して描かれた7枚の出行図のうちの1枚で、騎兵は兜をかぶり、稍を手に持っている(図7)。

②酒泉市丁家閘古墓群

丁家閘古墓群は酒泉市果園郷丁家閘村、戈壁灘上に位置し、110基以上の墓が分布している。新城古墓群とは距離が近く、同一の墓群であった可能性が指摘されている。壁画墓である5号墓は1977年に発掘調査が行われており、五胡十六国時代に属すると考えられている。[甘肅省文物考古研究所1989、張2001]

5号墓後室西壁「弓矢図」：奥壁第2層に、箱などの器物とともに弓矢が描かれている。弓は弯弓で弦が掛けられており、3本の矢は矢羽側を上にして矢袋に収納されている(図8)。

③高台县駱駝城古墓群

遺跡は張掖市高台县駱駝城郷に位置する。本稿で取り上げる苦水口1号墓(2001GLM1)は駱駝城西南古墓群の1つで、2001年に発掘調査が行われ、計71点の画像磚が確認された。後室奥壁に配置された9枚の画像磚のうち、2枚に武器が描かれていた[俄ほか2009]。

苦水口1号墓後室「武器図」1：弓矢と刀(劍)が描かれている。弓と3本の矢は弓袋、矢筒にそれぞれ収納されている。右側の5本の刀(劍)は鞘に収められた状態で、横向きに描かれている(図9)。

苦水口1号墓後室「武器図」2：戟、鍛、鉞、矛と推測される武器が6点、横向きに描かれている(図9)。

以上、河西地域の魏晋墓で出土した画像資料を概観してきた。その内容からは当時、長兵器の矛・戟・稍、短兵器の刀(劍)、投射武器の弓といった数種類の武器が使用されていたことが読み取れる。

出行図の歩兵は盾と戟、騎兵は稍を持っており、両者の間で使用する武器が異なっていたことがわかる。さらに、前室や中室で描かれた武器は、兵士や武官らが手にしたものであるが、墓主(被葬者)が埋葬された後室の画像磚や壁画では、武器を「器物」として単独で描

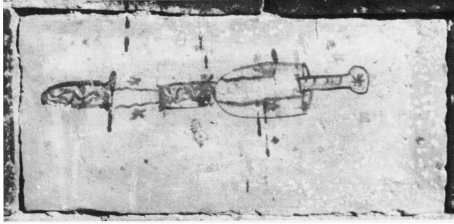


图5 嘉峪関市新城5号墓「刀鞘図」



图6 嘉峪関市新城6号墓「出行図」



图7 嘉峪関市新城7号墓「出行図」

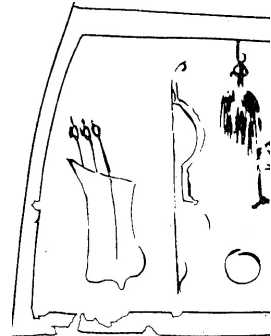


图8 酒泉市丁家閘5号墓「弓矢図」

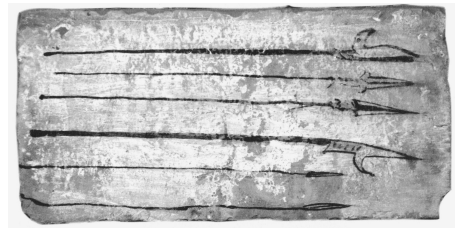
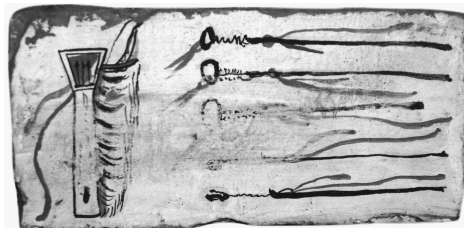


图9 高台县苦水口1号墓「武器図」1 (左)・「武器図」2 (右)

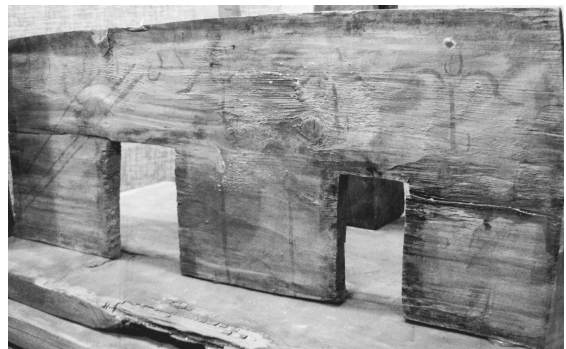


图10 高台县許三湾古墓群出土“塙堡”形木製品 (右は武器描写部分拡大)

いており、場面あるいは墓室によって武器の描き方を区別していた可能性が指摘できる。

2. 高台县許三湾古墓群出土“塙堡”形木製品に描かれた武器

許三湾古墓群は、張掖市高台县城から西に30kmの新壩郷許三湾村に位置し、漢代～唐代の墓が1000基余り分布している（図1）。防御性集落の“塙堡”³⁾を模したとされる木製品は、1988年に魏晋墓の一つから出土した〔王2007、張掖市文物管理局2009〕。盗掘されており、墓の形態や副葬品の出土状況などの詳細は不明であるが、木製品には複数の武器が描かれていたことから、画像資料の一つとして取り上げることとした。

出土した木製品の底部は長方形を呈し、四隅に角楼、中央に望楼が配置されている。大きさは長さ86cm、幅78cm、高さ74cmで、角楼の外側二面には「田」字状の窓が描かれ、内側二面には入り口として長方形の穴が空けられている（図10）。

正面の角楼の間には木板を取り付けて壁としている。壁には長方形に切り取られた穴があり、塙堡の入り口である正門、側門二つの門を表現している。その壁面全体に黒色で戟、矛、刀（劍）、弩の4種類の武器8点が描かれている。

向かって左の武器3点には、長い柄の先端に穂先がついている。左が「ト」字状を呈す「戟」で、中央と右の武器は「矛」と思われる。いずれも穂先を上にして、斜めに立て掛けているように見える。正門と側門の間には、環頭の「刀」あるいは「劍」が2点、柄（環頭）の部分を上にした状態で描かれている。木壁の中央から右にかけては、弦の取り付けられた「弩」が3点確認できる。弩は全て、壁面最上部に描かれた輪と紐によって吊り下げられている〔内田2011〕。

複数の武器を種類毎にまとめて描写するモチーフは、次に取り上げる漢代の画像石「武庫画像」で見ることができる。このことから、“塙堡”形木製品に描かれた武器は武庫に保管した状況を描写したものと考えられる。

3. 漢代の画像石、壁画墓に描かれた武器

ここでは、河南省、山東省、四川省で出土、採集された漢代の画像石と、内モンゴル自治区和林格爾（ホリソグ）の壁画墓を取り上げる。武器が登場する場面やその種類を概観し、魏晋時代の画像資料と比較するための材料としたい。なお、武器を描いた画像石は本稿で取り上げる資料以外にも確認できるが、今回は魏晋時代の資料を中心に分析するため、代表的なものを紹介するにとどめる。

①河南省

南陽市英庄出土「武庫画像」（後漢）：武器庫を描写したものとされる。1枚の画像石には盾

と戟が描かれている。別の1枚には「蘭錡」と呼ばれる武器架け（台座）に弩と斧がそれぞれ立てられており、その横には武器・武具を収めたと思われる箱が描かれている（図11）。

南陽市唐河県出土「武庫画像」（前漢）：2枚の画像石には英床出土画像石同様、武庫内の様子が描かれている。矛、戟、鍛、鎧、盾が蘭錡に斜めに立てかけられている。弩は4点描かれ、うち2点は戟の横に置かれている（図12）〔王ほか1990〕。

②山東省

鄒城市郭里鎮採集「武庫・人物・騎象画像」（後漢晩期）：画面中央下段に、戟、弓、矢、弩、刀（環首刀）のほか、武器を収めたと思われる箱が描かれる。弩と弓には弦が掛けられ、矢は矢筒に収納されている（図13）〔胡2008〕。

③四川省

成都市曾家包出土「武庫画像」（後漢）：釀酢鬲などと共に磚室墓に描かれた画像で、蘭錡に横向きに掛けられた鍛、戟、矛、刀、その下には、弩と弓、盾が描かれている（図14）〔劉2009〕。

④内モンゴル自治区和林格爾漢墓

和林格爾（ホリングル）漢墓は和林格爾県新店子郷に位置する。後漢に築造されたものとされ、墓室の壁全面に「出行図」や「寧城図」が描かれていた〔内モンゴル自治区博物館文物工作隊1978〕。

前室南壁「出行図」：図15は出行図で、馬車と騎馬隊が描かれている。騎兵は弓矢や矛、戟などの武器を手をしている。

前室－中室甬道北壁「寧城図」：寧城の南門外の様子を描写したものとされる。画面の上下段には蘭錡に掛けられた弩（右上、右下）、矛或いは稍（中央上）、戟（中央下）などの武器が確認できる。また、中段には環首刀を手にした武官や、鎧を身につけ矛を手を持った兵士の隊列が描かれている（図16）。

4. 副葬品から見た魏晉時代の武器の様相

点数は多くないものの、河西地域の魏晉墓では副葬品として武器が出土している。ここでは、嘉峪関市、酒泉市、高台县、敦煌市で出土した武器の特徴を明らかにするとともに、画像磚・壁画に描かれた武器と比較を試みる。

まず、武器が出土した遺跡の概要および武器の出土点数、内容を以下に記す。

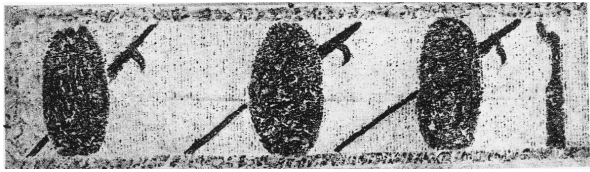


图11 河南省南陽市英庄出土「武庫画像」

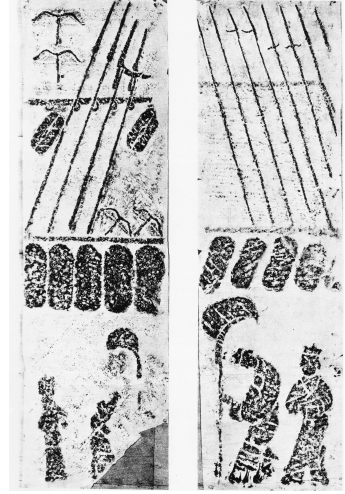
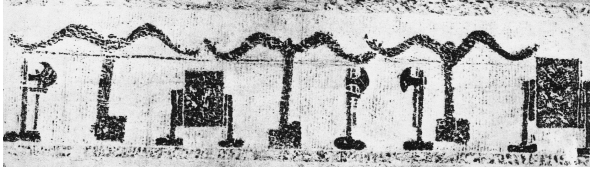


图12 河南省南陽市唐河县出土「武庫画像」



图13 山東省鄒城市郭里鎮採集「武庫・人物・騎象画像」

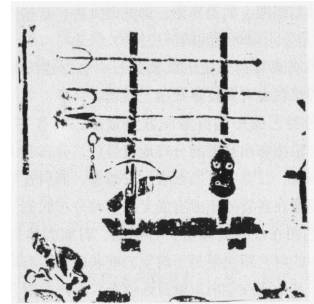


图14 四川省成都市曾家包出土「武庫画像」



图15 内モンゴル自治区和林格爾漢墓「出行図」

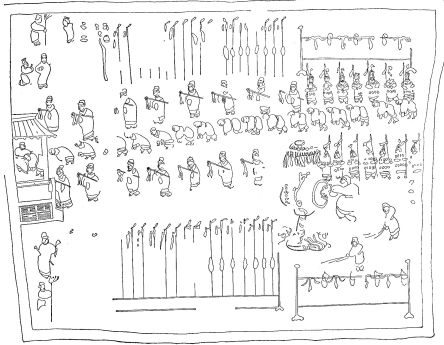


图16 内モンゴル自治区和林格爾漢墓「寧城図」

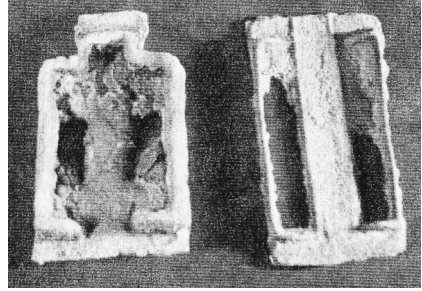


图17 嘉峪関市新城古墓群出土
銅製弩機郭 (縮尺不明)

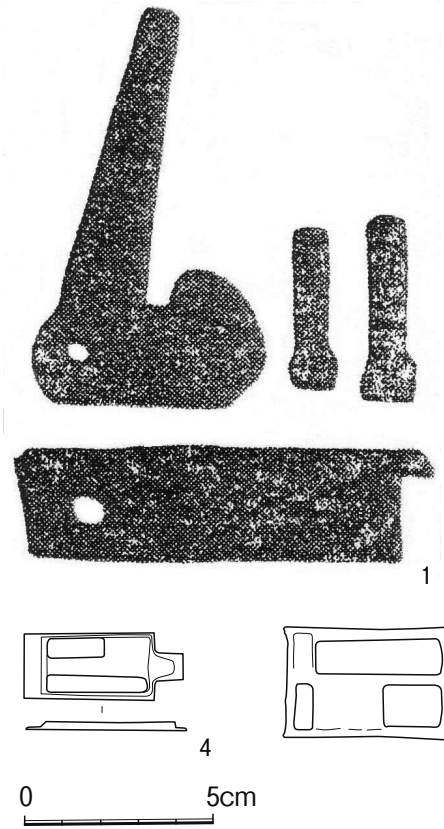
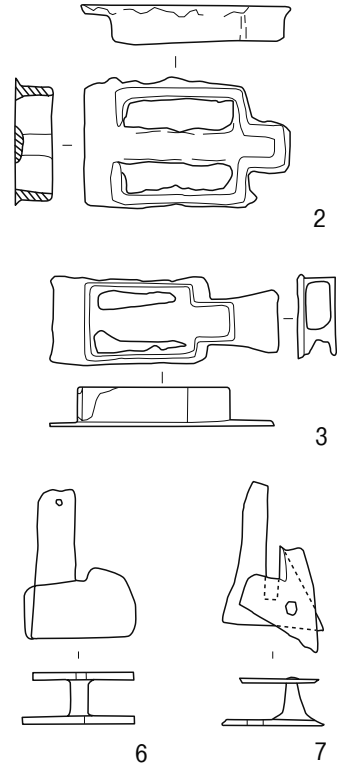


图18 河西地区魏晋墓出土 弩機

(1 酒泉市下河清1号墓 銅製弩郭・牙・枢、2 酒泉市西溝6号墓 銅製弩郭、3 敦煌市祁家湾210号墓 銅製弩郭、4 祁家湾212号墓 銀製弩郭、5 祁家湾308号墓 銀製弩郭、6 祁家湾210号墓 銅製弩牙、7 祁家湾363号墓 銅製弩牙)



①嘉峪関市新城古墓群

新城古墓群の概要については、先の記述を参照されたい。武器が出土したのは画像磚墓1、4、5、7、12、13号墓である〔甘肅省文物隊ほか1985、嘉峪関市文物管理所1982〕。銅製弩機郭6点（内訳：1号墓2点、4号墓1点、5号墓1点、7号墓1点、13号墓1点）弩機は矢の発射装置で、郭・牙（望山）・牛・懸刀・枢によって構成される〔参考資料2〕が、新城古墓群では凸字形或いは長方形を呈す郭の部分のみが発掘されている。出土した弩機郭の大きさは長さ4.6～7.7cm、高さ0.5～1.6cm、幅2.5～4.4cmであった（図17）。

銅刀1点

環頭の刀が1号墓で出土している。残存長56.5cm、柄幅4.6cm、刀身幅2.4cmと報告されているが、保存状態が悪く写真や図が掲載されていないため、詳細は不明である。

鉄刀2点

3号墓と12号墓で各1点出土した。3号墓の刀は環頭で、残存長20cm、柄幅2.9cm、刀身幅2.3cmであるが、図化されていない。12号墓の刀は残存状態が悪く、詳細が報告されていない。

②酒泉市下河清古墓群

下河清郷に位置する。1956年に調査が行われ、24基の墓が発掘された。概報には磚室墓である1号墓と18号墓のみが報告されており⁴⁾、1号墓では画像磚が出土している〔甘肅省文物管理委員会1959〕。

銅製弩機2点

いずれも1号墓より出土した。うち1点は郭と望山（牙）のみ残存している。もう1点は郭に望山（牙）と枢を伴っており、郭の長さは11.8cm、高さ2.9cm、幅3.5cmである（図18-1）。

銅刀1点

18号墓で出土した。ほぼ完形の環首刀で、長さは67.5cm、幅1.6cmである。

③酒泉市西溝古墓群

果園郷西溝村に位置する。遺跡の北西には新城古墓群、南西には丁家閘古墓群が分布していることから、西溝古墓群も大型墓群の一支群であったと推測されている。1993年に魏晋時代の墓7基の調査が行われた。武器が発掘された5号墓（93JXM5）と7号墓（93JXM7）は磚室墓で、画像磚も出土している〔甘肅省文物考古研究所1996〕。

銅製弩機郭3点

いずれも凸字形を呈する。6号墓出土の郭については大きさが報告されており、長さ5.5cm、幅3.4cm、高さ1cmであった（図18-2）。

銅刀1点

5号墓より出土した。柄の部分は欠損しており、残存長は42.8cm、幅1.8cm、厚さ0.3cmである。

鉄刀1点

銅刀と同じ5号墓から出土し、残存長は118cm、幅4cmである。

④高台县南華南灘墓群

遺跡は高台县南華鎮の南2kmに位置する。2003年に墓13基（後漢晩期～西晋早期）の発掘が行われた。武器が出土したのは、7号墓（2003GNM7磚室墓）と10号墓（2003GNM10土洞墓）である〔甘肅省文物考古研究所2005〕。

銅製弩牙1点

10号墓で弩牙（望山）が1点出土した。大きさは、長さ11.9cm、幅2.7cmで、下河清1号墓出土の弩牙（図18-1）と大きさ、形状ともに類似する。

銅刀1点

7号墓で出土したが、詳細は報告されておらず不明である。

⑤敦煌市敦煌祁家湾古墓群

祁家湾古墓群は、敦煌市街の西方5kmのゴビ灘上に位置している。1985年に117基の墓の調査が行われた。墓群の年代は、埋葬年を記した鎮墓瓶の出土により、西晋～十六国時代と考えられている〔甘肅省文物考古研究所ほか1994〕。出土した弩機は18点で、銅製と銀製に分かれるが、いずれも粗雑な造りで大小差がある。

銅製弩機郭8点

209B号墓、210号墓、319B号墓、320A号墓、321A号墓、340A号墓、362C号墓、370号墓で各1点ずつ出土した。図18-3の郭は210号墓から出土したもので凸字形を呈し、長さは6cm、幅2.2cm、高さ1cmである。

銅製弩牙8点

208A号墓、210号墓、318号墓、321A号墓、340A号墓、363A号墓、342号墓で各1点ずつ出土した。牙（望山）の高さは2.6～4.0cm、形状も一定でない。図18-6は210号墓、図18-7は363A号墓で出土した望山（牙）である。

銀製弩機郭2点

212号墓、308号墓で各1点ずつ出土している。212号墓出土の郭は長さ4.2cm、幅1.75cm、厚さ0.07～0.2cm、308号墓の郭は長さ4.8cm、幅2.95cm、厚さ0.05～0.1cmと銅製の郭に比べてやや小型である（図18-4、5）。

河西地域の魏晋墓に副葬された武器は、刀と弩機の2種類に限定されることがわかった。

副葬された刀は、新城5号墓や苦水口1号墓の画像磚にも描かれた環首刀であった。弩機は刀よりも副葬される割合が高いが、郭や牙といった弩機を構成する部品のみが出土し、完形のものはない。

弩は、秦漢代以降主要な武器として広く普及する。戦闘用として実際に使用されていた弩機⁵⁾と比べると、魏晉墓に副葬された弩機の多くは、2分の1以下の大きさで、造りも粗雑である。副葬品として弩が重視されていたことが窺えるものの、出土した弩機が実用的であった可能性は低く、さらに完形品が含まれないことも考慮すると、「明器」（非実用品）として副葬されたことが推測される。

まとめと今後の課題

以上、河西地域の画像資料を中心に魏晉時代の武器の実態を明らかにすべく、検討を行ってきた。嘉峪関市、酒泉市、高台县で出土した画像磚や壁画、木製品に描かれた「出行図」や「武器図」などにおいて、柄の付いた手持ち武器「戟」、「矛（稍）」、「鍛」、「鉞」、「刀」、「劍」や、投射武器の「弓矢」、「弩」といった数種類の武器を確認した。同時に、当時の歩兵と騎兵とでは使用する武器が異なることや、武器や武具を一定の場所で保管していた状況についても明らかにすることができた。

河南省や山東省、四川省、内モンゴル自治区などの漢代画像資料と比較すると、描かれた武器の種類や保管方法に大きな違いは認められず、魏晉時代の武器が漢代の伝統的要素を引き継いでいる可能性が高いと言える。

河西地域における魏晉墓の副葬武器は、弩機と刀の2種類に限定され、画像資料の内容とは異なっていること、そして弩については副葬された弩機が実用に適さないものであったことがわかった。漢代以降、副葬品における武器の比率が低下することはこれまでも指摘されてきた〔宇野2002、楊2005〕が、今回の分析結果は河西地域の武器も同じ傾向にあったことを示唆した。

漢代～魏晉時代における武器の鉄器化は、武器の進化・発展の一つとして捉えることができる。しかし、その一方で明らかになった副葬する武器の減少や非実用化（明器化）、壁画や磚画への武器の描写は、墓における武器（の役割）が形式化、形骸化していくことを象徴しているようにも見える。以降、武器を副葬した事例がほとんどないことから、河西地域における魏晉墓の武器が示す特徴は、漢代から南北朝・隋唐代への過程のなかに位置付けられるのではないだろうか。

なお、副葬する遺物の変容や磚室墓に武器を描いた背景には、当時の政治的影響や死生観・宗教観などが深く関わっていることが想定される。これらの問題については、他の副葬品や墓葬の形態、墓域（墓群）、そして当該期の文字資料なども含め総合的な検討を行う必要がある。筆者の今後の課題としたい。

注

- 1) 画像磚は、墓室の壁面などにはめ込まれた磚（レンガ）のうち絵が描かれたもの、壁画は墓室の壁面全体を利用して絵が描かれたもの〔關尾2011〕を指す。
- 2) () 内の英数字は報告書に記載された画像磚の整理番号を示す。
- 3) 塙堡は塙壁とも称す。豪族などが聚落を守るために築いた軍事的施設で、周囲に高い壁を築くのが特徴である。後漢から魏晉時代にかけて中国各地で建設され、河西地域でも数多く存在していた〔越智1970〕とされる。
- 4) 下河清1号墓および18号墓は、概報では後漢晩期の墓葬と報告されている〔甘肅省文物管理委員会1959〕。しかし、本稿では画像磚の特徴から新城古墓群などと同時期の墓葬とした張朋川氏の論考〔張1978〕を指示し、魏晉墓として扱うこととした。
- 5) 実用品と推測される三国～魏晉時代の銅製弩機が、河南省や湖北省などで数点出土している〔河南省文物管理局南水北調文物保護弁公室ほか 2010、襄樊市文物考古研究所 2010〕が、郭の長さは16～17cm程度である。

引用参考文献

(中文)

- 内蒙古自治区博物館文物工作隊 1978『和林格爾漢墓壁画』文物出版社
- 王愛民 2007「高台县文物分布狀況」『大湖湾期刊』総第5期、甘肅省高台县文学芸術界連合会
- 王建中・閃修山 1990『南陽兩漢画像石』文物出版社
- 岳邦湖・田曉・杜思平・張軍武 2004『岩画及墓葬壁画』敦煌文芸出版社
- 俄軍・鄭炳林・高国祥主編 2009『甘肅出土 魏晉唐墓壁畫』上・中・下、蘭州大学出版社
- 河南省文物管理局南水北調文物保護弁公室・四川大学考古学系 2010「河南衛輝市大司馬村晋墓發掘簡報」『考古』2010年第10期
- 嘉峪関市文物清里小組 1972「嘉峪関漢画像磚墓」『文物』1972年第12期
- 嘉峪関市文物管理所 1982「嘉峪関新城十二、十三号画像磚墓發掘簡報」『文物』1982年第8期
- 甘肅省文物管理委員会 1959「酒泉下河清第1号墓和第18号墓發掘簡報」『文物』1959年第10期
- 甘肅省文物考古研究所 1989『酒泉十六国墓壁畫』文物出版社
- 甘肅省文物考古研究所 1996「甘肅酒泉西溝村魏晉墓發掘報告」『文物』1996年第7期
- 甘肅省文物考古研究所・戴春陽 1998『敦煌佛廟湾西晋画像磚墓』文物出版社
- 甘肅省文物考古研究所 2005「甘肅省高台县漢晋墓葬發掘簡報」『考古与文物』2005年第5期
- 甘肅省文物考古研究所・戴春陽・張瓏 1994『敦煌祁家湾 西晋十六国墓葬發掘報告』文物出版社
- 甘肅省文物隊・甘肅省博物館・嘉峪関市文物管理所編 1985『嘉峪関壁画墓發掘報告』文物出版社
- 甘肅省博物館 1979「酒泉、嘉峪関晋墓的發掘」『文物』1979年第6期
- 高文 1987『四川漢代画像磚』上海人民美術出版社
- 胡新立 2008『鄒城漢画像石』文物出版社
- 襄樊市文物考古研究所 2010「湖北襄樊樊城菜越三国墓發掘簡報」『文物』2010年第9期
- 孫機 2008『漢代物質文化資料図説』(増訂本)、上海古籍出版社
- 張掖市文物管理局 2009『張掖文物』甘肅人民出版社
- 張宝璽 2001『嘉峪関酒泉魏晉十六国墓壁画』甘肅人民美術出版社
- 張朋川 1978「河西出土的漢晋絵画簡述」『文物』1978年第6期
- 張朋川・張宝璽 1985『嘉峪関魏晉墓室壁画』人民美術出版社

- 趙万鈞 2007「文物介紹11件（魏晉彩繪木塢堡）」『大湖湾期刊』第5期
- 敦煌文物研究所考古組 1974「敦煌晉墓」『考古』1974年第3期
- 南陽漢代画像石学術討論会弁公室 1987『漢代画像石研究』文物出版社
- 楊泓 2005『古代兵器通論』紫禁城出版社
- 李梅田 2009『魏晉北朝墓葬的考古学研究』商務印書館
- 劉朴 2009『漢画像石中的体育活動研究』人民出版社
(日文)
- 内田宏美 2010「甘肅高台县許三湾墓群出土“塢堡”形木製品について」『西北出土文献研究』2010年度特刊、科学研究費補助金・基盤研究（A）出土資料群のデータベース化とそれをを用いた中国古代史上の基層社会に関する多面的分析」プロジェクト
- 宇野隆夫 2002「東アジアにおける武器の画期」『武器の進化と退化の学際的研究—弓矢編—』国際日本文化研究センター
- 越智重明 1970「東晋南朝の村と豪族」『史学雑誌』第79編第10号
- 篠田耕一 1992『武器と武具 中国編』新紀元社
- 關尾史郎 2006「甘肅出土、魏晉時代画像磚および画像磚墓の基礎的整理」『西北出土文献研究』第3号、西北出土文献研究会
- 關尾史郎 2009「高台县的古墓群と主要出土文物をめぐるノート」『西北出土文献研究』2008年度特刊、科学研究費補助金・基盤研究A「出土資料群のデータベース化とそれをを用いた中国古代史上の基層社会に関する多面的分析」プロジェクト
- 關尾史郎 2011「もう一つの敦煌—鎮墓瓶と画像磚の世界—」新大人文選書7、高志書院
- 蘇哲 2007『魏晉南北朝壁画墓の世界』白帝社

図版出典

- 図1 筆者作成
- 図2 張 2001
- 図3 甘肅省文物隊・甘肅省博物館・嘉峪関市文物管理所 1985
- 図4 図3に同じ
- 図5 図2に同じ
- 図6 図3に同じ
- 図7 図3に同じ
- 図8 甘肅省文物考古研究所 1989
- 図9 俄・鄭・高 2009
- 図10 筆者撮影（於：高台县博物館）
- 図11 王・閃 1990
- 図12 図11に同じ
- 図13 胡 2008
- 図14 劉 2009
- 図15 内蒙古自治区博物館文物工作隊 1978
- 図16 図15に同じ
- 図17 図3に同じ
- 図18-1 甘肅省文物管理委員会 1959

2 甘肅省文物考古研究所 1996を一部改編

3-7 甘肅省文物考古研究所・戴・張瓏 1994を一部改編